

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどのごへんじ

四条金吾殿御返事

せつこしようぐんごしよ

(石虎将軍御書)

しじょうきんご ごとのご へんじ せつこしようぐんごしよ

四条金吾殿御返事（石虎将軍御書）

こうあんがんねん

うるう

がつ

にち

さい

しじょうきんご

弘安元年 (78)

閏 10月 22日

57歳

四条金吾

こんげつにじゅうににち しなの おく そうら もの につけ せに
今月二十二日、信濃より贈られ候いし物の日記、銭

さんかんもん はくまい のうまいたわらひと もちいざじつまい さけおおづつひと
三貫文、白米・能米俵 一つ、餅五十枚、酒大筒一つ・小筒

ひとつ、串柿五把、柘榴十。

そ おう たみ じき たみ おう じき ころも かんおん 防
夫れ、王は民を食とし、民は王を食とす。衣は寒温をふせ

じき しんみよう 助 たと あぶら ひ つ みず うお
ぎ、食は身命をたすく。譬えば、油の火を継ぎ、水の魚を

たす ひとり ひと がい おそ こづえ す
助くるがごとし。鳥は人の害せんことを恐れて木末に巢く

う。しかれども、食のために地におりてわなにかかる。魚は

じき ち 罠 うお

淵の底に住んで、浅きことを悲しみて、穴を水の底に掘つ
てすめども、餌にばかされて鉤をのむ。飲食と衣薬とに過ぎ
たる人の宝や候べき。

しかるに、日蓮は他人にことなる上、山林の栖、なかん
ずく今年は、疫癪・飢渴に春夏は過ぎ越し、秋冬はまた前に
も過ぎたり。また身に当たつて所労大事になりて候いつる
を、かたがたの御薬と申し、小袖、彼のしなじなの御治法
に、ようよう驗し候いて、今、所労平愈し、本よりも
いさぎよくなりて候。弥勒菩薩の瑜伽論、龍樹菩薩の

潔

そらう

みくすり

おんくすり

みろくぼさつ

ゆがるん

りゆうじゆぼさつ

大論を見候えば、定業の者は薬変じて毒となる、法華経
は毒変じて薬となると見えて候。日蓮、不肖の身に
法華経を弘めんとし候えば、天魔競いて食をうばわんとす
るかと思つて歎かず候いつるに、今度の命たすかり候
は、ひとえに釈迦仏の貴辺の身に入り替わらせ給いて御た
すけ候か。

これはさておきぬ。今度の御返りは神を失つて歎き
候いつるに、事故なく鎌倉に御帰り候こと、悦びいくそ
ばくぞ。余りの覚束なさに、鎌倉より来る者ごとに問い合わせ候

者

胴

丸

持

上

おんうま

たも

らんもの、またどうまろもちあげぬべからん御馬にのり給うべし。

摩訶止觀第八に云わく、弘決第八に云わく「必ず心の固きに仮つて、神の守り則ち強し」云々。神の護ると申すも、人の心つよきによるとみえて候。法華経はよきつるぎなれども、つかう人によりて物をきり候か。

されば、末法にこの経をひろめん人々、舍利弗と迦葉と、觀音と妙音と、文殊と藥王と、これら程の人やは候べき。二乗は見思を断じて六道を出でて候。菩薩は四十一品の

無明を断じて十四夜の月のごとし。しかれども、これらの
人々にはゆずり給わずして、地涌の菩薩に譲り給えり。さ
れば、能く能く心をきたわせ給うにや。
李広將軍と申せしつわものは、虎に母を食われて、虎に
似たる石を射しかば、その矢、羽ぶくらまでせめぬ。後に石
と見ては立つことなし。後には石虎將軍と申しき。貴辺も
またかくのことく、敵はねらうらめども、法華經の御信心
強盛なれば、大難もかねて消え候か。これにつけても能
く能く御信心あるべし。委しく紙には尽くしがたし。恐々

きんげん

謹言。

こうあんがんねんつちのえとらのちのじゅうがつにじゅうににち

弘安元年 戊寅後十月二十一日

にちれん
日蓮

かおう
花押

しじょうさえもんどのごへんじ
四条左衛門殿御返事